

ぽんこつ陰陽師あやかし縁起

京都木屋町通りの神隠しと暗躍の鬼

桔梗 楓 Kaede Kikyo



アルファポリス文庫

〈目次〉

プロローグ

第一章 木屋町通りの神隠し

第二章 ひとつの身体に、魂がふたつ

第三章 地獄へ沈む者に差し伸べる手

第四章 へっばこ陰陽師は、デキる陰陽師の弟子になる。

エピローグ

306 288 231 76 12 4

プロローグ

三月十五日、丑三つ時。

場所は神奈川、工業地帯の片隅。俺——駒田成喜こまだなるきは古来より密かに継承された陰陽師おんみょうの役目を果たすべく、果敢に怨霊と戦っていた。

「だからさ、俺はそう、本当は平和主義なんだよ。わかる？ 和を尊ぶのだ」
激しい戦いが繰り返されている。

低級の怨霊がどこからともなく現れては、次々と俺に襲いかかった。

「オリヤー！」

しかしその怨霊たちは着物姿の少年に軒並み殴られて、びゅーんと海に落ちていった。
「君も、そういう気持ちを持っていたはずなんだよ。だって同じ日の本出身の人間だからな」

「てりヤー！」

びゅーい。

「うんうん、そうか。君は、いわゆる室町時代の人なんだな。ほうほう……そうか、今
でいう落ち武者おとしやつてやつかあ」

「ほあちヤー！」

びゅびゅーん。

「氷鬼ひょうきうつせえ。向こうでやれ！」

「雑魚怨霊ざこごんれいがオマエを狙うから、オレが倒してやってんだロ！」

着物姿の少年——氷鬼が、猿のように顔を真っ赤にして怒り出す。

「この雑魚どもは、この人を支柱にして力を得てるんだ。つまりこの人が消滅すると、
雑魚怨霊はただの浮遊霊うきりょうに戻っちゃう」

「なるほど。それが困るから、執拗しつようにナルキを狙ってるわけだな」

と言いながら、氷鬼は俺に襲いかかってきた怨霊をベシッとチョップする。

「じゃあとつとど、どうにかしろヨー！」

「今どうにかしようとしてるだろ！ うるせーから音立てずに戦ってくれ！」

「無茶言うナ！ オマエがへっばこだから代わりに守ってやってんだロ！」

喧々囂々けんけんごうごう、氷鬼と言い争いをする。その時、今までの雑魚怨霊とは格が違うデカブツ
怨霊が、どこからともなく現れて襲いかかってきた。

「たアツ！」

水鬼が跳び蹴りを食らわせる。しかしデカブツ怨霊は少しのけぞるだけで、他のヤツみたいに飛んでいかない。

「こいつ武者だ。黒くて見えづらいけど、昔のヨロイをつけてる」

「この辺一帯のボスって感じだナ。ようやく重い腰を上げたってわけカ」

身軽な身体で宙返りした水鬼は、地に足をつけるとバネのように跳ね飛ぶ。

「もしかして、こいつが落ち武者を利用して雑魚怨霊を呼び寄せたんじゃねえか？」

「その可能性はあるナ。アチヨー！」

なんか妙な叫び声を上げて、水鬼がグーでパンチする。あいつ、また変な動画見たな。水鬼の趣味は動画配信サイトを見ることなのだ。こんな子供のナリをしているが一応いにしえの時代から存在している鬼である。そのくせに、タブレット操作はお手の物。俺が汗水たらして働いている間も、配信アニメとか投稿動画とかを視聴してゲラゲラ笑つてるので、時折殺意が湧いてしまう。

「ナルキ、コイツはオレが張っ倒すから、そいつ、はやく『説得』しろヨ！」

そう言っつて、水鬼は武者怨霊を軽々持ち上げると、工業地帯から走って離れていく。

他の雑魚怨霊はまるで金魚のフンのように、ぞろぞろと武者怨霊についていった。

「ふう」

ようやく静かになった。この場に居るのは、俺と口数の少ない落ち武者怨霊のみ。

俺はその場であぐらをかき、静かに佇む怨霊と向かい合わせになった。

「さあ、話し合おうぜ。この世に未練を持つ、かつて人であった者」

怨霊は暴れこそしなかったが、怒りや憎しみ、悲しみといった負の感情が漂っていた。当然の話だ。怨霊は怨みの霊。非業の死を遂げた者が憎しみの果てにたどり着く、悲しい結末のひとつ。

だけど、怨霊ははじめから怨霊だったわけじゃない。

かつて人であった時代があった。その頃は、当たり前のように喜び、幸せを感じたこともあったはずなんだ。

「なんでも聞いてやる。好きに話せよ。……俺はさ、陰陽師だけど、あんた達の話聞くことしか、できないんだ」

自分で言っつて、なんて情けない陰陽師だと笑ってしまふ。

水鬼が俺を『へっぽこ』と言っつていたが、まったくもってその通り。無能で無力、役立たずの陰陽師なのだ。ただ、怨霊の『声』を聞くことだけはできる。まあ、こんなことは他の陰陽師でもできるだろうし、なんの自慢にもならないだろうけど。

怨霊はしばらく戸惑ったような様子で黙っていたが、やがて、ぼつぼつと話し始めた。公家の流れを汲む武士だったとか。妻と子供がいたとか。

そして戦で負けて落ち武者となり、命からがら逃げたものの掠奪に遭い、妻と子供を目の前で惨殺され、すべてを奪われた。

聞けば聞くほど、怨霊にもなっちまうよな、と納得してしまう壮絶な過去だった。

俺は目を瞑り、黙って聞いた。

こうすればよかったという後悔を話された。そもそも戦で勝てさえすればよかったのだという恨み言も聞いた。

心の吐露をすべて聞き終えるころ、その工業地帯は朝焼けに照らされていた。

「辛かったんだな」

言うことがなくなつたのか、黙ってしまった怨霊に、俺は話しかける。

「憎いやつ、いっぱいいたんだな。でもそいつらはもう、この世にはいない。やりきれない話だな」

怨霊になれたというのに、本当に憎いやつらはあの世にいるのだ。こいつは怒りを向ける相手も見つけられず、ずっとこんな場所できすぶっていたのだろう。

「奥さんと子供が、あんたを待ってる。まだ、行ってやらないのか？」

その言葉に、怨霊がふるふると震えた。

「そろそろ行つてやれよ。何百年待たせてると思つてんだよ。間違ひなく待ちくたびれるぞ」

呆れたように、笑つて言つてやった。

工場に張り巡らされた金属パイプに、朝の光が反射する。まぶしさに目が眩むと、怨霊の姿がふいに薄くなった。

「ア……アア、オレ、ハ——」

怨霊にも聞こえる、低く唸るような声。でもそいつは、神に祈るように天を仰いでいた。

「オレ、ハ……タダ、キイテ、モライタカッタ……ノカモ、ナ——」

そう言つて、怨霊は朝日に溶けるように消滅した。自分で滅びを選んだ——いや、会いたい人に会いにいったのだろう。

ふう、と息をつくとき、向こうのほうから「おーイッ」と水鬼の声が聞こえた。

「あのヨロイ武者、いきなり消えたゾ。そっちは片付いたのか？」

てくてくと歩いてくる。あんなデカブツと切つた張つたしてたはずなのに、ピンピンしているところが、なんとも鬼だ。

「ああ、今、旅立ったよ」

俺は天を仰ぐと「あゝ」と叫んで、その場であおむけに倒れる。

「一晚中ずーっと陰気なオッサンの愚痴聞かされた！ どんだけ溜めてたんだよアイツ。すげえ疲れた！」

愚痴を聞くのって結構疲れるのだ。へたなこと言えないし、ひたすら相づちを打つことしかできない。世の中のカウンセラー、君たちはすごいぞ。俺は絶対なれねえ。

「ははっ、ナルキはソレしか取り柄がないからナー」

「ほっとけ」

九字を切ろうが符を投げようが、俺の陰陽師としての攻撃力は皆無に等しいのである。できるのは、怨霊の声を聞くことと……身を守る符や、治療符の作成くらい。そこが得意でも、怨霊を倒せなければ無意味なのだ。

俺は、こうやって辛抱強く怨霊を『説得』することしか、彼らを祓うことができない。断言してもいい。俺以下の陰陽師はいない。へぼ陰陽師選手権があったら一位を獲る自信がある！ はっはっは……悲しい。

「あのデカブツ武者は、元は雑魚怨霊だったんだろうな。落ち武者怨霊から、力を奪い取っていたんだろ」

「なるほどナ」

水鬼が納得したように頷いて、俺と同じようにゴロンとその場で横になる。

「はあ、でもまあ、なんとか怨霊にはご退場頂いたし、とっとと帰って姉ちゃんに報告すっかー」

「ナルキの姉ちゃんって、オレよりも鬼みたいだよナ。こんなへっほこを笑顔で怨霊スボットに送り込むんだカラ」

「愛の鞭！ とか言ってるけど、姉ちゃんは俺をいじめるのが趣味だからな」

なんとも嫌な姉である。でも、どうしてか姉ちゃんの命令には逆らえないのだ。行けと言われたらどんな怨霊渦巻く死地でも行くしかない。実はなんらかの強制符でも貼られているのではないかと思っただけで、身体中調べたこともあったが、特になかった。

多分、幼少のころから俺にとって姉は魔王だったので、なんとというか、言うことを聞けくしかない魂に刷り込まれてしまっているのだろう。

でもまあ、悪い人ではない。多分。アドバイスとかくれるし、時々いいこと言うし。「よしっ、帰るかあ！」

俺は最後の力を振り絞って疲労した身体を起こし、工業地帯を後にした。

第一章 木屋町通りの神隠し

さて、陰陽師という単語を聞いた時、人はどんなイメージを思い浮かべるだろう？
 古代のまじない師。式神を使って悪鬼を退治する退魔師。例えば、安倍晴明や蘆屋道満は陰陽師を代表する人物だ。

しかしどんなイメージにしても、陰陽師は物語の中の存在に過ぎないというのが、現代に生きる人の通説。

忍者や武士と同じように、過去にあった職業でしかないのだ。

いや、むしろ伝承のほとんどが眉唾ものだと思われているかもしれない。だって怪異を祓うのが仕事なんて言ってみろ。一気に危ない人に認定されてしまう。頭がおかしいとか、変な宗教に入っているとかわかれて、奇妙な目で見られてしまう。

だが、俺——駒田成喜の家系は、そういうおかしい部類の家だった。

正真正銘、陰陽師の家系なのである。

だから、幼少の頃から陰陽道を学んだ。霊符や形代の作り方、印の結び方、星の読み

方、様々な教育を施された。

しかし、悲しいことに俺は陰陽師としての才能が皆無だった。

幾度か怪異を祓わなければならぬ場面に出くわしたのだが、俺は一度として悪鬼や怨霊を退治することはできなかったのだ。

結局、俺は陰陽師という特殊な家の末裔だっただけで、自分自身はなんの変哲もない、特別な力などまったくない、平凡な人間だった。

父はさじを投げたし、俺も現在、陰陽師とはまったく関係ない仕事に就いている。

知識があろうと、特別な勉学に励もうと、才能がなければ意味がないのだ。そして人は生きるために食い扶持を稼がねばならない。俺は身の丈に合った人生を選んだのだ。

そもそも、陰陽師を生業にして食っている時代は遙か昔に終わったのである。

安倍晴明のような素晴らしい才能を持つ者など、この世にはもういない。

——そう、思っていた。

話はガラッと変わるけれど、売れないライターにとって大事なものは、持続性のあるメシの種だ。単独でスクープをピックアップできたら一気に波に乗れるだろうけど、現実にはそううまく話は転がっていない。

俺の仕事はライティングだ。スクープひとつ取れない雇われライターだけだ。昨今は、ネットで仕事を請け負うフリーライターや、本業の傍らでペンを取る副業ライターが主流みたいだけど、俺は運良く出版社に拾われた専属ライターである。

グルメや美容、観光スポットを取材して記事にしたり、うちの出版社が出している週刊誌のひとつを賑やかしたりするのが主な仕事だ。

これらの仕事がつまらない……というわけではないけれど、グルメや美容の記事が書きたくてライティングの職業にかじりついているわけじゃないんだよなと、漠然とした不満を抱いている。

運良く俺のところにスクープが転がり込んでこないかな、なんて夢を見ているけれど、現実には厳しいものだ。人生とは、宝くじでも当たらないかぎり、地道な積み重ねしかないのである。

「もしもし、あ、姉ちゃん？」

都内にある出版社に向かう途中、俺は駅のホームで姉に電話をした。

『連絡がおそい！ 生きてるか死んでるかくらい、昨日のうちに言いなさいよ』

のっけからこれである。人をあんなヒデーところに派遣しておいて、おつかれさまの一言もないのか、この鬼姉は。

「昨日は疲れたから、家帰ってすぐ寝たんだよ。てか、死んでたら連絡できねーし」

『陰陽師の端くれなら、黄泉の国から声を飛ばすくらいの離れ技しなさいよ』

「無茶いうな！ 俺はあくまで一般市民なんです」
は〜とため息をつく。

「あんなに怨霊が溜まってるなんて想像もしてなかった。姉ちゃん、実は俺を殺す気だろ」
『そんなわけないでしょ。水鬼くんもいるんだし、大丈夫だと思ったから行かせたの。星の巡りを読んで、ナルくんに凶の兆しは見えなかったからね』

「あっそう……」
急に脱力してしまい、カクツと肩を落とした。

俺が言いたいのはそういうことじゃないのだ。怨霊を攻撃する術を持たない陰陽師モドキの一般市民を危ない目に遭わせるなど言いたいのだ。でも姉の占いで俺の身が危うくないと示されたのなら、どう転んでも命の危機には陥らなかつたらう。

姉の占いは百発百中。外れるということがない。

「でもそれが分かっていたなら、最初からそうだと行ってくれたらいいのにさ」

『わかってないわね。私が占いの結果を口にするだけで、運命が悪い方向に変わる可能性だってあるのよ。危機が迫っているなら忠告するけど、安全だと出ている占いなら、

わざわざ言う必要ないでしょ』

「俺の心が安息を得るためには、言っただけの情報だったけどな！」
 終わりよければ全てよしというけれど、実際に、怨霊渦巻く危険地域に赴く俺の身にもなって頂きたい。

『とにかくお疲れ様でした。報酬は、いつもの銀行に振り込んでおくからね』

「まいどどーも。でもさあ、いつも思うけど、これ俺がやる必要ないよな。知り合いに腕利きの陰陽師とかいねーの？」

『いたら即行頼んでる〜！ 今や陰陽師なんて絶滅危惧種なのよ。天然記念物なんだからね〜！』

「俺はトキかつ」

『うーん。トキほど孤高の存在感はないね。残念だけど……ナルくんはカワウソとかオサンシヨウウオってあたりかな』

「それはけなしてるとことだな？」

『ラプリーということよ。カワウソ可愛いでしょ』

「まったく嬉しくない！」

俺が怒ると、姉はケラケラと笑った。

『氷鬼くんにもお礼を言わないとね。毎回うちの愛弟あいでいを守ってくれてるわけだし。今度おいしいごはんをごちそうしてあげなきゃ』

「おう。なんか最近、クレープを食べたがってたぞ」

『クレープ？ へ〜、そういうところ、鬼のくせにラプリーね。飼い主に似るのかな？』
 「はいもう切りますね〜！」

半ギレで怒鳴る。ラプリーと言われて喜ぶ男がどこにいるのだ。いや、いるかもしれないが、俺は嫌なのである。

丁度いいタイミングで、電車が到着した。

『そういえば、今はお外にいるの？』

「うん。編集長に呼ばれたんだ。どうせ細かい雑用だろうけど」

『なるほど。しがたない雇われライターは大変ね。頑張ってるね〜社会人くん』

「へいへい、クビにならない程度に頑張るわ」

そう言っただけ、俺は電話を切った。

ふうと息をついて電車に乗る。ガタゴトと揺れる車内、窓の景色を眺めつつ――

俺は陰陽師の仕事をするより、ライターのほうがずっと楽なだけだな、と思った。

俺が所属する出版社は、都内某所にあるビルの一室にある。入り口のドアを開けると、むわっと煙草たばこのにおいが広がった。

「おう駒田、来たか。すまんなん。校正の原稿がたまってるんで、ちよつくら見てくれねえか。担当の戸田ととが入院したんだよ」

編集長の呉くれさんが、デスクで原稿にペンを走らせながら言う。

「いいつすよ。戸田さんって、今妊娠してるんですよ」

「そそ。切迫早産の危険があつて、昨日の夜から入院したんだ。まあ、そこまで深刻じゃないみたいだけだな。電話の様子でも元気にしてたし」

「そっか。それならよかったです」

デスクにつくと、原稿に目を通し始めた。

ちなみに、うちの出版社はとても狭い。十畳あるかないかというスペースに、オフィス用デスクがすし詰めのように並んでいるわ、壁という壁は本棚やロッカーが置いてあるわで、人の行き来するスペースがほとんど無い。あとヤニとコーヒーのにおいがすごい。しばらく作業に集中する。テレビでは、おなじみのワイドショー番組をやっていた。

『近頃世間を騒がせている京都連続行方不明事件は、いまだ解決の糸口が見つかっていません。警察は総力を挙げて捜査していますが、進展は一向になく……』

あれ、またこの事件だ。毎日毎日飽きもせず、ここ最近はこのワイドショーもこの難事件を話題にしている。

「今日、新たな行方不明者が出たらしいな」

呉さんがテレビをチラと見て呟いた。

「朝のニュースでやってましたね。これで十人目ですか」

——『京都神隠し事変』。

今、京都で起きている不思議な事件のことを、SNSなどではそう呼称している。事件の内容は読んで字の如く、京都で行方不明者が続いているのだ。

二ヶ月前、高校二年の家出少女が行方不明になった。親が捜索願いを出して警察が動き始めた頃、次は大阪に住むカップルが京都に遊びに来た時、同時に行方知れずとなった。そして、主婦、高齢者の男性、サラリーマン、Webデザイナー……、性別も年齢も職業も全てばらばらな人達が次々と姿を消していく一方、事件の捜査は難航している。「こういう事件に関わってみたいなあ。運が良ければ大スクープを掴めるかもしれないし」

今、最も脂の乗っている事件だ。ライバルは多いだろうけど、ライターとして成功する秘訣は当たって砕けるだと思ふ。

「呉さん。俺、京都に行つてこの事件を追つてみたいですよ」
 冗談半分で言つてみた。先ず間違ひなく『何言つてんだバカ』と一蹴されるだろうけど、言うだけならタダだ。

「あ〜？ そんなもん追えるわけないだろ。警察だつて苦勞してるくらいなんだぞ。しがないライターが運良く真相に迫れるのは、ドラマの世界だけなんだ」
 ほらやっぱり。

呉さんが夢も希望もないことを言う。言葉のナイフがグサグサ刺さつて痛いなあ。

「どうせ京都に行くなら、もつと読者が飛びつきそうなネタにしろよ」

「連続行方不明事件も十分飛びつくと思ひますけど？」

「そういうシリアスなのじゃなくて、もつと軽く読めるネタつてことだよ。ほら、ちよつと前に話題になつただろ。タコとイカのペテン師とか、そういう名前のやつ」

「……『蛸薬師の占い師』、ですね」

タコしか合つてねえ。

蛸薬師の占い師は、一時期話題になつた人だ。なんでもその占い師に相談すると、自分の望む性格に生まれ変われるのだという。誰が聞いても胡散臭い話だ。

それに話題になつたといつても、週刊誌でちよつとネタにされたくらいである。俺も、

どうせ新興宗教かスピリチュアル商法に引つかつた『信者』が、大げさに吹聴しているだけだろうと思つて、まったく真に受けていない。

「占い師で言うなら、俺の姉ちゃんのほうが話題にしやすいんじゃないですか」

「ああ、『星辰の卜者』か。そうかもしれないな。でも、連続行方不明事件なんて取材に行つたところで大手のマスコミが幅を利かせてるし、門前払いが関の山だぞ」

「うう〜それを言われると諦めるしかないんですけど！」

俺は洪面を浮かべて唇を尖らせた。すると、呉さんがぶつと噴き出す。

「面白くないって顔に書いてあるなあ。ほんとわかりやすいヤツだ」

「ここ一年くらい、ずーっと同じようなグルメやダイエットの記事ばかり書いてたら、そりゃこんな顔になりますよ」

刺激が足りない。仕事がつまらない。……まあ『飯の種』に面白いも面白くないもないんだらうけど。

俺がムスツとした顔をしていると、呉さんが「確かになあ」と頷いた。

「仕方ない。最近ヘルプの校正もよくやつてくれてるし、たまには取材ルポもいいか。経費半分でいいなら行つてきていいぞ。ただしメインは、京都グルメとおすすめ穴場スポットを調べてくること。それからタコ焼きの占い師もよろしく」

「だから蛸薬師ですって」

呉さんにツッコミを入れつつも、取材の許可が下りたことはとても嬉しい。

彼にはこういう心意気があるから、俺は薄給ながらもこの会社を辞めずにいるのだ。確かに、京都は鉄板の人気ネタである。それっぽいことを適当に紹介するだけでも読んでもらえる、安定の話題性がある。

うちで出してる週刊誌は最近マンネリ化しているし、呉さんとしては、ここらでいっちょ京都人気にあやかろうと考えたのだろう。

名目はグルメと面白ネタの取材だけど、それさえやれば、あとの時間は好きに使っていいのだ。よし、せっかく巡ってきたチャンス。うだつのあがらないライターからちよつと売れるライターにレベルアップするためにも、巷を騒がす行方不明事件になんとっても食らいついてやる！

俺は握りこぶしを作って気合いを入れるのだった。

数日かけて編集の雑務を片付けた俺は、さっそく京都に向かう。

移動は新幹線を使った。きつぷに表示されている指定席を探して、荷物を荷台に載せたあと、ゆつたりとシートに座る。

「シンカンセンに乗るの、ひさびさだな！」

横を見ると、隣の席には相変わらずの和服姿をした少年——氷鬼が座っていて、楽しそうに草履を履いた足をぶらぶらさせている。

氷を想像させるグレイヘアッシュの髪色。目じりの上がった三白眼は鮮血のような赤。

そして額に生えた、二本のツノ。それは彼が人でないことを如実に表していた。

「あまり騒ぐなよ」

俺が注意すると、氷鬼はけらけらと笑う。

「オレが騒いでも、誰も見えねえし、聞こえねえからいいじゃん」

「俺が煩いの嫌いだから言っただよ！」

思わず声を上げると、近くにいた乗客が訝しげにこちらを見た。慌てて窓に顔を向け、イヤホンマイクを耳にはめて電話をしているふりをする。

「けけけ。オレよりナルキのほうが騒がしいナ」

「ほんと煩いな。いいから景色でも見てろ。ほら、新幹線が走りだすぞ」

「わっ、見たイ！」

氷鬼はびよんとジャンプして、俺の膝に乗る。そして窓に両手をつけて景色を見始めた。

——こういうところは、本当の子供みたいなんだけどなあ。

水鬼は長寿の鬼だ。気が遠くなるほど昔から存在していたという話だから、もしかしたら千年以上は生きているのかもしれない。

対して俺たち陰陽師——俺は端くれだが——の起源は奈良時代らしいが、その頃は自然哲学に基づいた占術や、曆を読む仕事などを生業なまわにしていたらしい。今の人が持つ陰陽師のイメージ——怪奇を祓はらったり、九字くじを切ったり——の、歴史が始まったのは平安時代と言われている。

俺もそういう荒唐無稽な技が実際にできるのだ。効果の程は別として。

ちなみに姉も、陰陽師としての退魔の力はからつきしである。ただ、占術の腕がずば抜けていて、今も占い師で生計を立てている。

『星辰せいしんの卜者ぼくしゃ』などと呼ばれていて、お忍びで政界のお偉いさんや、大御所の芸能人なんかも通っているのだとか。

どの時代も、権力者や大物は、占いが好きらしい。

俺は、残念なことに占術も得意ではない。ほんこつ陰陽師に得意なものなど本当にないのだ。

水鬼が俺についてきている以上、鬼を武神に下す力はあるのではと、もしも水鬼が見える人がいればそう思われるかもしれないが、これがそうでもない。俺の膝で目をキラ

キラさせて景色を見ている水鬼も、こいつが悪さしている頃に説得して拝み倒し、悪行を止めてもらったのだ。その後なぜか気に入られてしまい、式神契約をしたのだが……。こんな話、情けなくて誰にも言えない。

実家は東京郊外にある小さな神社で、神主であった父は陰陽師としての才能を持ってた。でも、子供である俺達は……姉はともかく俺に関しては役立たずもいところ。

幼少の頃にはすでに父に見限られており、陰陽道を教えてもらえないこともなくなった。どうやら退魔術というのは、生まれ持った才が必要で、努力で補えるものではないらしい。

『怨霊を祓はらえない陰陽師など無能だ。お前には心底失望した』
幼少時、父に吐き捨てるように言われたのを、今でもよく覚えてる。

父は蔵に保管してある陰陽道の書物を読むことを禁じた。

でも俺は、こっそり蔵に忍び込んで独学で陰陽道を学んだ。

それは悔しくて見返してやろうと思ったのか、それとも単に父に認めてもらいたかったのか、今でも動機はよくわからない。

だけど結局——努力して学んでも、治癒や防御のためにそこそこ便利な霊符を作れるようになったくらいで、それ以外の才能の芽が伸びることはなかった。情けないが、父の言葉が正しかったことを自分で証明してしまったのだ。怨霊と話せたところで、祓はらえ

なければ意味がない。

中学に入るころには、俺と父の関係は最悪レベルになっていた。彼が会話するのは母と姉だけ。無能な子供はいらないと、目の端にも入れたくないと言わんばかりに徹底した無視をされた。

まあ、うちは陰陽師の家系といっても、有名な安倍晴明のような由緒正しい血筋ではない。いわゆる民間陰陽師ってやつだった。

遙か昔、洛外らくがいに追放されて地方に流れ着いた陰陽師が陰陽道を広めたのが民間陰陽師のはじまりという話だが、実際にはあまり明らかになっていない。

ただ民間陰陽師は、実力の乏しい下級陰陽師が多かったのだとか。

父は実力者だったようだが、たまにはそういう人も出てくるだけで、多くは俺みたいな一般人に毛の生えた人しかないんだろう。

少なくとも俺は、陰陽道で飯を食うなんて夢のまた夢なのだった。

地道にコツコツ生き、堅実な仕事につくのが一番楽で確実な生き方なのである。ライターが堅実な職業かと問われるとちよつと悩むところだが、一応好きなことで飯が食えるのだから、俺の人生は中の上だろう。

人生で一度くらいは恰好よく怪異を祓はらってみたいな〜と思わなくもないが、俺が今ま

で出会ってきた悪鬼や怨霊は、話せば分かるヤツばかりだった。先日むしやの落ち武者怨霊だつてそうだった。でも、話の通じない怨霊と出会つたとして、俺が恰好よく祓はらえるわけがないので、実際にそうなつたら尻尾を巻いて逃げるしかないのだが。

実に情けない話である……

ところで、俺に陰陽師としての仕事を押しつけてくるのは、例の鬼姉おにあねである。

彼女はどこからともなく悪鬼や怨霊の情報聞きつけては俺に投げてくるのだ。

嫌がらせとしか思えないが、どうやら姉は、俺を立派な陰陽師にしたいらしい。

俺としては、どうせなら立派な報道記者になりたいのだが。今のライター職にしたって、その足がかりみたいなものだし。

メ切前でヒイヒイ言いながらパソコンのキーボード打ってる時に、メッセージアプリでポイントと陰陽師の仕事を押しつけてきた日には、頭の血管がプチッと切れそうになる。「そういえば、ナルキ。ナツキには京都に行く話をしたのか？」

新幹線の窓にへばりついていた氷鬼がふいにこちらを見た。

ナツキは姉の名前。『夏妃』と書く。ナルキにナツキと、名前が似すぎているので、小さいころは学校でよくからかわれた。

「一応な。取材に行くときだけ、メッセージアプリに書いておいた」

「ふむ。ナツキはなんと返事していタ？」

「『お土産は阿闍梨餅あじりもちでよろしく。それから、今の京都は気をつける』、だつてさ」

「なるほど。やはりそうカ。オレも、今の京都は面白いことになっていと思つていタ」
水鬼がニカッと歯を光らせて笑い、再び車窓からの眺めに興じる。

本当は、俺がどこに行こうと姉に報告する義務はひとつもないのだが、彼女はご当地スイーツを食べるのが好きなのである。だから、言わないで遠出すると後が怖いのだ。主に、拗ねる。ずっとヘソを曲げる。嫌がらせの呪詛玉まじまじを送ってくるなど本当に面倒くさい。だから仕方なく報告している。

姉のリクエストは阿闍梨餅あじりもち。これだけは忘れないように買っておかないとな。

そして俺は、姉が返信してきたメッセージアプリの内容を思い出す。

『今の京都つて、平安の暗黒時代の到来かつていう程、魍魎ちみりょうが跋扈ばつこしてるから気をつけてね☆へっぽこナルくんだと。パクツと食べられちゃうかも！ お土産忘れないでね☆』

……今年で二十八になる女が、語尾に星をつけるのは、どうかと思う。

そしてお土産を買い忘れたら恐ろしい八つ当たりが待っていると思うと、ぜんぜん可愛くない。

それにしても、魍魎ちみりょうが。姉ちゃんの占いだから当たってるんだろうけど。

京都といえは陰陽道の聖地みたいな場所である。力の強い場には怪異が集まりやすいから、昔から京都には地縛霊や怨霊がうじゃうじゃしている。中学・高校と、修学旅行は京都だったけど、ほんと……嫌になるくらいあちこちにいたのを覚えていいる。

だから、相次ぐ行方不明事件にしても、蛸葉師たこやくしの占い師にしても、相変わらず胡散臭うさんくさい話題に事欠かない街だなあとというのが俺の率直な感想だ。

「ま、とりあえず、到着したらいろいろ見て回りたいな。確認したいところもいっぱいあるし」

この旅行の最大の目的は、世間を賑わす行方不明事件を追つて、スクープを手にする事。これを主軸にしつつ、呉さんに頼まれた取材を進めていこう。

姉が言う魍魎ちみりょうは今のところ考えない。考えても仕方ない！

怪異は、見ない振りをすれば、案外寄つてこないものだ。

俺はどうせお祓はらいできないし、京都の鬼や怨霊つてやたら強そうだし。

それになにより、俺は怪物退治に行くわけではない。欲しいのはスクープなのだ。触らぬ神に祟たたりなし。できるだけ関わらないようにしよう。

春の京都といえば、秋と同じくらい人気の高いシーズンである。

だが、三月初旬はちよつと時期尚早だったのだろうか。

「と……さむっ!？」

京都駅に到着してホームに立った途端、底冷えするような寒さにブルツと身が震えた。

「え、京都の三月、寒すぎじゃないか？ これ真冬並みじゃないか？」

やばい。薄手のスプリングコートでは防寒が足りない。できればマフラーも欲しいところだ。

「晴れていれば温もりがあったかもしれないが、残念なことに曇りだな」

水鬼がひよつと宙に浮き上がって空を見る。

俺は「本当だ」と空を仰いだ。

今にも泣き出しそうな真つ黒い雲に覆われた京都は、鬱屈とした霧囲気を孕んでいた。晴れた日の春や秋の季節は、それこそ心が浮き立つほどに華やかなのに。

その時、ふわんと嫌なおいがした。肉の生臭いにおい。俺は鼻を摘まんであたりを見回す。

「くっせえ。これ、姉ちゃんが言ったとおりかも」

この独特の悪臭は、怪異が近いというしるしだ。姉ちゃんが平安の暗黒時代の再来と

言っていたけれど、本当かもしれない。

「タイミング悪かったかなあ。でも、せっかく取材費をもぎ取ったんだし、期待されてるぶんは働かないと」

俺は鼻を擦ってから、スマートフォンを取り出す。

まずは連続行方不明事件について、一通りの場所を訪れておきたい。

この事件の概要については頭にたたき込んである。俺はさっそく地下鉄の京都駅に向かい、烏丸線からすませんに乗ると、事件のあらましを思い出した。

——京都連続行方不明事件。

この二ヶ月の間に、十名もの人が行方不明になっている。年齢、職業、性別、すべてがバラバラで、統一性がないのが特徴だ。

警察の捜査は難航しているものの、ひとつだけ、不可解な共通点がある。

それは、行方不明になった人達は必ずとある場所での目撃情報があるということだ。

地下鉄を走る電車はごうごうと音を立て、やがて目的の駅に到着する。

烏丸御池からすまおほいけ。言わずと知れた、京都市の中心地だ。

京都は基盤の目に沿った街づくりであるのが有名で、割と道路が狭いイメージがあるのだが、御池通りは車道も歩道も広々していた。

平日だからか、あまり通行人はいない。もう少し南に下がった四条なら、もつと賑わっているのかもしれないが。

寒いなあと思いつつ、スマートフォン地図を頼りに歩く。

御池通りを東に向かっていくと、やがて高瀬川が見えてきた。このあたりの川沿いを、木屋町通りという。

行方不明者は皆、この木屋町通りにある、古い廃ビルに入るところを目撃されているらしい。

その目的の廃ビルはほどなく見つかった。

一階は普通の居酒屋。手前にある外階段を上がったところに廃ビルへ入る扉がある。

高さは三階建てだろうか。京都は景観維持のために建物の高さ制限があるから、ビルといっても低めだ。

築年数は……五十か六十くらいあってもおかしくない。うちの出版社があるオフィスビルといい勝負だ。老朽化で取り壊し寸前という感じである。

「ふうむ、におうナ」

俺の頭にびよっと座った氷鬼が興味深そうに言う。

「氷鬼も気づいたか。俺もさつきから、鼻がもげそう」

たまらず鼻を摘まんでしまう。京都駅でもおいはしたが、ここは強烈だ。

まさか……いや、心のどこかで可能性には気づいていた。でも、決めつけるのはよくないと思って考えないようにしていた。でも、これは……

「連続行方不明事件には、怪異が関係しているのか？」

警察が必死に捜査しても手がかりひとつ見つからないのは、怪異が原因だったからだろうか。

いや、早とちりかもしれない。何しろ京都は怪異のデパートなのだ。大昔より、有名な鬼が暴れ放題、魍魎も目白押し、陰陽師は引く手あまたで大繁盛していた。この場所に限らず、京都は多かれ少なかれあちこちで怪異のおいがしている。

それゆえだろうか。昔からこの街では気の流れを少しでもよくしようと鬼門を祀ったり、場を祓い清めたりと、災いを遠ざける努力を欠かさなかった。しかし時代が変わっても気が濃みやすい傾向にある。更に京都は盆地ということもあって、どう

というわけで、京都……とりわけ市内は、こういう怪異の吹きだまりのような『場』があちこちにある。

でも、行方不明者がここに入っているのは事実みたいだし……

「うーん。中に入ってみないことには何もわからないな」
 「なら、入ればいいじゃないか。なにをためらっているル？」

俺の頭から飛び降りた水鬼が不思議そうに首を傾げる。
 「そう簡単に入れるわけないだろ。ここが行方不明の現場になっているなら、間違いく出入り口は施錠されているだろうし」

試しに、階段を上って鉄製の扉の取っ手を引っ張ってみた。しかしガチャガチャと音が鳴るのみだ。やっぱり鍵がかけられている。あと、取っ手には『立ち入り禁止』と書かれたプラスチックがぶら下がっているし、京都府警のラベルがついた黄色いテープが吊り下がっていた。

すると水鬼がにんまりと笑う。

「霊符で封印されているわけでもなし。こんなもの、オレにとつたらお茶の子さいさいだ」
 そう言うなり、水鬼の姿が消える。程なく——扉の鍵がカチャンと鳴った。

内側から扉が開いて、出てきた水鬼がニカッと歯を光らせる。

「ほら。扉をすり抜けて中の鍵を開けてやったゾ」

「お前なあ……」

俺は呆れてしまつて頭を掻く。水鬼は関係ないだろうが、俺が中に入れば間違いない

住居侵入罪だ。警察にしょっぴかれてしまう。式神が鍵を開けてくれたんですと言いつても、誰ひとり信じてくれないだろう。最悪、事件の参考人として捕まってしまうかもしれない。

だが、中が気にならないかと言われたら、そりゃ気になった。

一応、端くれとはいえ陰陽師だし、怪異と行方不明事件が関係しているかどうか確かめる必要がある。あと、やっぱり大スクープをすっぱ抜くチャンスかもしれないし、逃したくない。

「よし！ 警察に見つかつたら素直に謝ろう」

この扉の鍵は最初から開いていた。そして俺は好奇心から入ってしまったがいないポライターつてことにしよう。これなら叱られるくらいで済むだろう。多分。

ギイ、ギギギ。

錆び付いた扉を閉めると、建物の中は真つ暗だった。

「うーん。亡霊でも出てきそうな雰囲気だな」

「単なる亡霊なら可愛いものじゃないか」

水鬼が呑気に言う。確かにその通りだ。幽霊は基本的に何もしない。悪さをするのは怨霊と呼ばれる『悪しき霊』だけだ。

「怨霊に出会ったら嫌だなあ。話を聞いてくれるヤツならいいけど、京都の怨霊って根暗そうだしなあ」

なんとなくイメージで言ってるだけなので、別に京都に他意があるわけではない。「ま、その時はオレにまかせておケ」

ずんずんと前を歩く氷鬼が頼もしいことを言ってくれる。

ビルの中はガランとしていた。フロアの中には何もなくて、ただ埃ほこりの積もった床が広がっている。

その奥には上にあがる階段があった。俺と氷鬼が階段の奥を見ると、その先は扉になっていた。

「行ってみるか？」

「そうだな。この部屋には手がかりらしいものも見当たらないし」

足音を立てないようにして階段を上る。

そして鉄製の扉の前に立って、ドアノブを握った。

鍵はかかかっていない。扉をギイッと開ける。

「……うわ」

扉の向こうは、屋上だった。

頬に触れる空気は生ぬるく、そしてえもいわれぬ臍物へらもののおいがする。

手で口を覆った。これは怪異のしるしだ。それも強烈に濃い。

屋上は多くの亡霊でひしめきあっていた。まるですし詰め状態だ。

「おお、壮観だな」

氷鬼が面白そうに目をきらきらさせて、亡霊の中にダイブしていく。

「俺には不気味にしか見えない」

楽しそうな氷鬼に呆れながら、俺も歩いて行く。

屋上の広さは、十畳程度といったところ。ビル自体が小さいので、屋上もなかなか狭い。そんな中で、隙間がない程亡霊が詰まっている。こんな光景は生まれて初めて見る。

「亡霊は高いところに集まりやすいと聞いたことがあるけど、これは異様だろ」

タワーのてっぺんやら、ビルの上上やら。なぜか亡霊は高いところが好きなのだ。もしかすると、天国に行きたい願望があるのかもしれない。実際、亡霊が行くべき場所は

地の底にあると言われる黄泉よみの国なのだが。

亡霊たちは静かにふよふよと漂たなづっている。白いモヤのようになっていて、その亡霊が生前どのような形をしていたのかは知るよしもない。

意志の強い亡霊は生前の姿にもなれるらしいけれど、そんなのはごく一部だ。少なく

ともここにいるものは皆、力の弱い亡霊のように見える。

ただ、こんなに狭い場所に大量にいるのは異様以外の何物でもない。

「それにしてもくっせえな。嗅覚が麻痺してきたよ」

こんなにおうとうということは、それだけ怪異の異常性が強いということだ。だが、亡霊はふつうにおわないものだ。

つまり、この場自体が怪異になっているということ？ 怪異と亡霊の関連性はわからないけれど。

「やっぱり、京都の連続行方不明事件って……」

俺がそう呟いた時、屋上の扉がギギイと開いた。慌てて振り返り、構えを取る。

現れたのは——黒のビジネススーツに、クリーム色のフードつきコートを着た男。

年齢は、俺より年上だろうか。やたら背が高く、体格が良く、二十代後半から三代前半という感じがした。少しボサついた黒髪に、堅物そうな顔立ちをしている。

……誰だ？

その疑問は男も感じたようで、彼は俺を見るなり訝しげな顔をした。

「お前、部外者か。施錠してあったのに、どうやって中に入ったんや」

男はそう言いつつ、ポケットから手帳を取り出して開いて見せてくる。

それはまごうことなく警察手帳だった。

やばつ、ケーサツだ。念のため用意していた言い訳を口にしよう。

「あーえつと、いやーその、鍵がなぜか開いてたんですね。それで、しがなイルポライターの俺は好奇心からつい中に入ってしまいました、アハハ」

「そんな言い訳が通じると思うてんのか。ここの管理任されてんのは俺やぞ」

男は剣呑な目をして俺を睨み付ける。

なるほど。そういえばビルの入りに口に警察の黄色いテープがついていたな。そりゃ事件に関わっている場所なんだし、当たり前か。

よし、言い訳が通じないなら開き直ってみよう。

「まあまあ、俺がどうやって入ったかなんて些細なことじゃないですか」

「些細なわけあるかい。今すぐ出ていけ」

「いやーせっかくですから色々話を聞かせてくださいよ。警察の方なら、世間を賑わせている連続行方不明事件について捜査しているんでしょう？ なかなか解決の兆しが見えませんが、府警はどういう方針で動いているんですか？ 何か新しい手がかりでも見つけられましたか？」

「あんなあ、そんなん教えられるわけないやろが。それにこの事件は単なる行方不明事

件やない。せやから……」

そう言ったところで、男はふいに俺の後ろに目を向ける。

そして、まるで敵でも見るかのようにギロリと眦まなじりを吊り上げた。

「お前、それ」

男が呟く。しかしその時、あたりに漂たなよっていた亡霊のひとりが突如うなり声を上げた。

『オオオオオオ！ ヨキ魂……ヨキ魂ダ！』

ただそこにいただけの無害な亡霊が、周りの亡霊を押しつけながらぐんぐん巨大化していく。

「ちっ、亡霊が怨霊化したか！」

亡霊は悪さをしない。でも、時々『怨霊』になってしまふことがある。

その大半が、この世に未練があったり、生前に悪行を行ってしまった者たちだ。

徳を積んだ『よき魂』を食らい、自分の魂を浄化しようとする亡霊のなれの果て。本

当は、魂を食ったところで自分の魂が浄化されることはないが、ひとたび怨霊と化してしまうと、まともな思考は期待できない。

怨霊にとつて陰陽師は、己を滅ぼす天敵であると同時に涎よだが出るほど美味な『よき魂』だ。

白いモヤだった亡霊は黒く禍々まがまがしい霞かすみとなり、こちらへ襲いかかってきた。

「ナルキ！ オレの後ろにい口！」

氷鬼がサツと俺の前に立った。そして怨霊にツメを立てようとする。

だが、その瞬間——怨霊はその場で金縛りになったように固まった。

「臨、兵、闘、者……」

それは密教の九字。陰陽師ならば誰でも知っているであろう言葉に、俺は目を丸くする。

慌わがてて振り返ると、刑事の男が黒い手袋を脱いだ右手を振りかぶり、人差し指で大きく五芒星ごぼうせいを描いていた。

「……皆、陣、列、前」

低く、透き通るような声色の九字の文句は、思わず聞き入ってしまうほど綺麗で。

俺だけではなく、氷鬼までポカンと口を開けていた。

「——行」

男が最後の言葉を口にした瞬間、宙に描いただけの五芒星が光り輝く。それは大きく広がったあと、檻おりのように怨霊を囲み、小さく萎しぼんでいった。

最後には手の平ほどのサイズになって、音もなく消え失せ。

すげえ。霊符も式神も使わず、九字を引くだけで怨霊を祓はらってしまった。相当の実力

があるってことだ。もちろん俺にはできない。

刑事の男は手袋を嵌めてから、コートポケットに手を突っ込む。

そして胡乱な目つきをして、俺に問いかけてきた。

「お前、もしかして陰陽師か？」

男の言葉に目を丸くする。やっぱりこいつは――

「そういうお前こそ陰陽師なのか」

まさか同業者に出会う日が来るとは。こんな埃を被った古くさい稼業につく者はそういないだろうと思っただけに、驚きである。

いやあ、さすが京都。陰陽師の本場なだけあって、やっぱりいるんだなあ。

しかも警察官が陰陽師もやってるとは。世間は広いなあ。

男は不機嫌そうに俺を見たあと、氷鬼に向かって顎をしゃくった。

「どうでもいいが、ソレはなんや？ 式神のつもりなんか？」

「オレを前にして『ソレ』扱いとはいい度胸だナ！ 天下の氷鬼様だゾ！」

氷鬼がムツとして男を睨み、一歩前に出て腕をまくる。

「こらこら、喧嘩はダメだぞ」

俺がたしなめると、男が訝しげな顔をした。

「ソレ、どう見ても悪鬼やろ。鬼を制して式神に下したのならたいした腕やと思うけど、お前は見たところ陰陽師として半人前や。そんなんが鬼を隷属化させたとはいえへん」
そう言っつて、男はまるで敵を見るかのように俺を睨む。

「つまり――お前は、鬼に操られてしもうた……傀儡に成り下がった陰陽師ということか？」

ザワツと空気が変わる。

敵意を露わにした男の睨みは威圧的で、畏怖すら感じる。

冷たい氷のように凍てついた空気に、周りにいた亡霊が怯えたように震えだした。

「ま、待て！ 警察で陰陽師のオッサン。違う。俺は氷鬼に操られてるわけじゃない」

「誰がオッサンやねん！」

「確かに俺は、半人前の陰陽師だ。でも、氷鬼は悪いヤツじゃないし、俺は傀儡になっ
ていない！」

俺は氷鬼の前に立ち、かばうように両手を広げる。

「こいつはっ、……その、友達みたいなものなんだ」

「はあ？」

「氷鬼は、俺の地元で悪さしてた鬼だ。でも、説得して、わかってもらったんだよ。そ

れ以降は一度も悪さしてない。弱い俺を見かねて、自ら式神になってくれた鬼なんだ」
 真摯に言うのと、男の顔は段々と呆れたものに変わった。

そして、まるで新種の生き物を見るかのような目で俺を見て「……説得？」と首を傾げる。

「お前、悪鬼を説得したんか。ほんで、そいつは人間の味方やって話を信じろと？」
 「完全な味方とは言えないかもしれないけど、氷鬼はもう絶対に悪さはしないって約束してくれたんだ。……鬼は、人を惑わすけれど、嘘はつかない」

きっぱりと断言する。

男はしばらく黙った後、俺と氷鬼を見比べて冷たく返した。

「その与太話は信じられへんけど、敵意がないのはホンマみたいやな。そっちが仕掛け
 て来うへんなら、とりあえずは見逃したる」
 そして小さくため息をつくど、俺に背を向ける。

「どうせその鬼が牙を剥いた時、最初に犠牲になるのはお前やろし。俺は、お前が食わ
 れてる間に準備して、後で鬼を滅せばええことやしな」
 「うわー、ナルキの信用が悲しいくらいにゼロだナー」

「うう、初対面でそこまで言われる筋合いはないと思うんだが！」

圧倒的な実力差をひしひしと感じているので、俺は彼の背中に非難の言葉を浴びせる
 くらいしかできない。

「アホか。信用なんかゼロどころかマイナスや。どうせ地方の民間陰陽師から派生した
 エセ陰陽師なんやろうけど。いい加減な修行で陰陽師気取って、挙げ句の果てに鬼に取
 り憑かれたら世話ないわ。怒りを通り越して、いっそ呆れるで」
 「ひ、ひでえな！」

確かにウチは代々民間陰陽師だ。陰陽術総本山である土御門家に認められた陰陽師と
 の差は、認可されたか、されていないかだけなので、どっちが正しいかという話は別な
 のだが、まあ、狭い陰陽師の界限では、どうしても認可されたほうが正統派っぽい感じ
 にはなるし、民間陰陽師はうさんくさい目で見られがちだ。

実力さえあればその価値観を覆すことも可能だが、少なくとも俺の腕では、彼を納得
 させることは無理である。

なので、俺にできることといえば、ヤツの背中を睨むことだけだった。悲しい。

「中途半端に陰陽術をかじると破滅の未来しかない。己の驕りで鬼に食われるのなら、
 それは自業自得や。そこまで面倒見る義理はない。まあ、後始末はしたるから安心し。
 それが俺の仕事やからな」

吐き捨てるように言う男に、俺はムツと唇をへの字に曲げる。
なんだこいつ。

京都の陰陽師ってこんないじわるなヤツばかりだとか言わないよな？ 言いそうだな。

「あっそう。プライドの高いインテリ陰陽師様は、やっぱり言うことが違うね。血も涙もなく、笑えるよ」

思わず減らず口を叩いてしまった。だってこいつムカつく。人の話を信じないし、鬼は裏切ると決めてかかるし、俺と会話する気ゼロだし。

コイツがどんなにお偉い人だったとしても、俺はこいつを尊敬することはない！

男は俺に何か言い返すこともせず、そのまま屋上の出口に歩いて行く。
「とにかく、さっさとここから出て行けよ。ここがヤバイってことくらいは半人前以下でもわかるやろ。ほんで、今更やけど不法侵入やで。次はないからな」

吐き捨てるような言葉を残して、屋上を出て行った。

ぼつんと残された俺。後ろには氷鬼。周りには亡霊たち。

「なっ……」

ぐぐぐ、と拳を握りしめる。

「なんだあいつー！」

空に向かって怒鳴った。ずっと溜め込んでいた怒り爆発である。

「ハハハ。いやあ久しぶりに見る正しい陰陽師だったナ。ナルキ、アレが普通の陰陽師なんだぞ？」

俺の周りをびよこびよこ飛び跳ねて、氷鬼が楽しそうに言う。

「正しいか正しくないかはどうでもいい！ 態度が失礼すぎるだろっ！」

「いや、鬼を前にしているにしては、だいぶ理性的な態度だったと思うけどナ。短気な陰陽師なら会話する間もなくオレと戦ってただろうヨ」

「そ、そんなに陰陽師って、問答無用なのか？」

俺が知ってる他の陰陽師なんて、父親くらいだ。その父親にしても、実際に鬼や怨霊を前にして戦っている姿は見たことがなかった。

氷鬼はニヤリと笑って、俺の頭に飛び乗る。

「当然だロ？ 一秒の油断が死に繋がる。鬼との戦いとはそういうものダ」

「そこまで殺伐さいばつとしているのかあ……？」

「ナルキがいかに変わりダネか、よく理解できたか？ フフフ」

上から俺の顔を覗き込む氷鬼の顔を、俺はぐいと手で押し上げた。

「うるさいな」

別に鬼が相手でも、会話ができるなら、まず会話を試みるのが人情ではないか。他の陰陽師は、ちょっと人の話を聞かなすぎである。

あとあの偉そうな陰陽刑事は、カルシウムを摂ったほうがいい。イライラしてる雰囲気はひしひし届いてきて、こっちまでムカムカしてしまった。どこの一族か知らないが、陰陽師として以前に人としてどうなんだ。

「あ、そういえばあいつ……なんて名前だったんだろ」

はじめから喧嘩腰だったので、聞きそびれてしまった。

しかしまあ、別に知らなくてもいいだろう。もう二度と会うことはないだろうし。というかもう会いたくない。

「さて、俺も行くか……」

ぐるりと周りを見回して、出口に向かう。どうやらこの場所で得られるものはなさそうだ。

それに、陰陽刑事も言っていたが、ここは良くない場所である。あまり長居したくない。さっきみたいな怨霊が現れたのも、この『場』が異常だったからだろう。それにこのすし詰めになった亡霊たちも、何らかの理由があつて集まっているのかもしれない。

悔しいけど、俺の腕でどうにかなる怪異じゃないのはわかる。

俺は重々しい鉄の扉を開けて、早足でビルの階段を降りていった。

古い建物から出た途端、肌寒い春の風が頬を撫でる。

「ふう」

ほっと一安心して、俺は息をついた。

やっぱりこのビルは怪異そのものと化しているんだな。

そんなビルに入っていった人達が軒並み行方不明になっている。

「連続行方不明事件は、やっぱり怪異が関わっているのかなあ」

木屋町通りの歩道を歩きながら、ブツブツと呟いた。まあどう考えても無関係ってことはないよな、あからさまに怪しいし。ただ、ふたつの要素がどう繋がってるのかはまったくわからん。

思い出すのは、あの場に現れたコートの男。

彼は警察官でありながら陰陽術を使っていた。しかも、かなり高い腕を持っている。どうして陰陽師が警察官の仕事をしているんだろう？

確かにこの業界は一部の実力者以外は、とてもそれで食べていける世界ではないが、

あれだけの実力があれば、うちの親父みたいに陰陽師だけで食っていけそうなのに。

いや、問題は、それよりも。

「怪異が関係してるなら、スクープにならないじゃないかーっ！」

はあため息をつき、がっくりと肩を落とす。

京都連続行方不明事件の真相は、摩訶不思議な怪異であった！……なんて、今どきの週刊誌でも書かないぞ。いや、宇宙人の仕業にしてみたら、ひよっとしたらネタとして笑ってもらえるかもしれないな。しかし、どちらにしても三流ネタ決定である。

たとえ真実が怪異によるものだったとしても、今の世の中、誰もそんな話は信じないのだ。

「無駄足だったなあ」

とほとほと高瀬川のほとりを歩く。現状では間違いなく記事は書けない。スクープを手にしてみせると呉さんに息巻いておいて結果がコレとは、なんとも情けない。

もうひとつ、情けないついでに言ってしまうと、俺は陰陽師としてあの怪異をどうにかすることはできないのだ。

いっそ笑ってしまう。姉が聞いたら呆れた顔をして『恰好わるっ』とか言いそうだ。

「まあでも、あいつがなんとかしそうだし、いっか」

あのビルで出会った陰陽刑事は、もしかすると、怪異を祓うために来たのかもしれない。それなら、半人前の俺が心配するだけ無駄ってものだ。

「それなら、気を取り直して仕事しよっ！」

物思いにふけて高瀬川を眺めていた俺は、パンと頬を叩く。

俺が京都に来た目的のうち、目標としていたのは大スクープのゲットだったわけだが、他にも仕事がある。それは、呉さんに依頼された京都の穴場スポットとグルメ探索だ。

一応、それなりに計画はまとめてある。

記事のコンセプトは『大人の京都旅』。すでに何度も使い倒されたネタではあるが、今回は『一人旅』にズームしている。

昨今は、誰もが仲良く土日祝が休み……というわけにはいかず、友達や家族と旅行に出かけたとしても休みが合わない、なんて話をよく聞く。

それならいっそ一人で旅を試してみては？ という方面でアプローチするわけだ。

俺は仕事柄あちこち出かけて取材しているけれど、一人旅というのは悪いものじゃない。たまには気ままに、ノープランで、ふらっと街を歩くのもいいものだ。

そして京都は見応えのあるスポットの宝庫である。

一人旅というからには落ち着いた雰囲気、静かに心を休められるような、癒やしの